

アジサイ

あぢさゐの ^{やえ}八重咲くごとく ^よ八つ代にを
 いませわが背子 ^{せこ}見つつ ^{しの}偲はむ ^{たちばなのもろえ}橘 諸 兄

左大臣として国政のトップにいた橘諸兄が天平勝宝七年 (755年) に詠んだ歌である。「あぢさゐが八重に咲くように、いつまでも栄えて下さい。あぢさゐを見ながらあなたをお慕い申し上げます」。橘諸兄は大伴家持とも親交があり、『万葉集』の選者の一人でもある。

“わが背子”を ^{しょうむ}聖 武天皇とする説がある。しかし背子とは、同等の身分の親しい男に対する言葉である。したがって“わが背子”は宴席を催した主人を指しているのであろう。聖武天皇は、娘の孝謙天皇に譲位して、男性としては初めての上皇になった。上皇と諸兄は親密だったと言われているが、ある宴席で、上皇に対して不敬の言葉があったとする ^{ざんげん}讒言 (上皇は無視しているが) で、諸兄は辞職を余儀なくされている。上記の歌を作って間もなくのことである。これは推測であるが、諸兄は ^{こうし}皇嗣問題で不満があったのかもしれない。

八重咲きとあるこの歌のアジサイは恐らくガクアジサイであろう。花のように見えるのは、^{がく}萼が変化した装飾花であり、^{かじょ}花序 (これが本物の花) の回りに額のように縁取って咲いている。ガクアジサイは日本に自生する原種である。これがその後さまざまに改良されて園芸品種として世界に巣立って行く。アジサイの学名は「*Hydrangea macrophylla*」、英名は「*Japanese hydrangea*」である。「*hydrangea*」とはギリシャ語で「水の器」を意味している。そういえば梅雨の雫を受ける皿のようにも見える。シーボルトはオランダに帰ってから、花序全体が装飾花であるアジサイの新種を「*Hydrangea otaksa Siebold et Zuccarini*」と命名しているが、日本人妻「お滝さん」の名を入れ込んだものである。アジサイの日本語の語源は「^{あつ}集 + ^{さい}真藍」と言われている。鮮やかな藍色のガクアジサイを指していたのであろう。日本の梅雨は重い雲に覆われて、じとじとして鬱陶しい季節である。ただ唯一アジサイの花が爽やかに色づいて、気持ちを和ませてくれる。

アジサイは漢方では用いられないが、民間薬として、葉や花を煎じて ^{ざやくしつ}瘡 疾のような熱病に利用されていた。ただ、葉や根を食べると、めまいや嘔吐、顔面紅潮、痙攣、昏睡、呼吸マヒなどを来すことがあるという。大塚敬節は『漢方と民間薬百科』で、「葉または花10 gをせんじて、かすをこし、一晚夜露に当ててから飲む。有 ^{ありもちけいり}持桂里によれば、これを飲むと吐くとのことであるが、戦争中日本にもマラリア病の人があり、私もこれを用いたが、下痢した者はあったが、必ずしも吐くとは限らなかった」と述べている。

今年の梅雨、参議院選挙の応援演説をしていた安倍元総理が、狙撃されて絶命した。直後に世界の多くの首脳から弔辞が寄せられた。半旗を掲げた国もある。日本だけでなく世界に残した功績は大きかった。コロナ、ウクライナ、外資に侵食される日本など、重い空気に覆われている中、安倍氏の存在は梅雨どきのアジサイのようでもあった。安倍氏の好きな色は紺、好きな花はアジサイと、どなたかがツイートしていた。安倍氏に直接接触した文化人は皆、悪意に満ちたマスメディアの報道とは逆に、ユーモアのセンスと爽やかな人柄に感服すると語っている。亡くなって初めて存在感の大きさに気づかされる人である。昔の総理・橘諸兄も、以前、巻頭言「セリ」でも述べたように気遣いの人であり、文化人でもあったが、藤原氏の再興で消え行く運命にあった。安倍氏に捧ぐ歌。

あぢさゐは ^{とき}重き季こそ ^も輝けり
 国守りたまえ ^{たかま}高天の原で (山人)

